

NPO法人丹波漆 現状と課題

NPO法人丹波漆 高橋治子

NPO法人丹波漆は、関西圏の漆生産の核として 2017年度より国庫補助を受けている

1, 国庫補助を受ける前の状況と課題

① 技術を継承する人の状況

やくのちょう

ゆらがわ

- 明治には夜久野町を含む由良川流域に 500 人の漆掻きがいた
- 戦後、産業の移り変わりにより衰退
- 昭和 60 年ごろ、夜久野の最後の漆掻きである衣川光治氏が呼びかけ 30 代 40 代の後継者が 10 人近く集まったが、現在残っているのは岡本嘉明氏だけ。
- 現存しているウルシの樹が少なく、生業としては成り立たない。

きぬがわみつじ

おかもとよしあき

②技術継承に欠かせない資源(ウルシの樹)の状況

- ・産業の移り変わりにより、山の環境も変わっていった(戦後、スギ、ヒノキ等の植林)
- ・山林家や農家にとって高い収益を上げることができない
- ・昭和60年代、かぶれる木として植栽が進まなかった
- ・1人の漆掻きが生業として掻く本数が確保できない
→漆掻きを続けられない→技術の消滅寸前

漆掻き(人・技術) × ウルシの樹 = 生業の成立

2, 国庫補助の効果

①国庫補助の概要

- 後継者養成: 漆掻き技術の伝承
- 漆植栽・育成技術の伝承

②「人」と「資源」の状況

- 後継者の現在 **指導者(1名)と後継者(研究生として3名)**
- 「資源」の増加 **ウルシの樹(植樹累計)は補助前は794本、補助後は1780本**

中期目標3000本

3人で1年間300本のウルシの樹を掻くとして、10年間の循環サイクルを作る

現状の課題

- 漆が採れるようになるまで(10年から15年)の管理費が必要
- ウルシ植栽適地の調査検討
- 良い苗を育てるための技術伝承も必要
- **後継者の生活を支える仕組みが必要**

(逆にウルシの樹の管理経費のためにNPOメンバーの賃金寄付で一部運営資金を賄っている)

技術継承を確実にするために、**事業を発展させる必要がある**

継続による新しい価値

- 植樹祭をおこなうことにより、新しい理解者や協力者が増える。
- 漆工芸品等を理解してもらうために漆掻き現場が必要とされている。
- 金継ぎなどのブームにより、漆掻き現場の取材や、作家などに写真提供の機会が増えている。
- 京都の漆文化の歴史や物語としての役割を担っている。
- 京都府や福知山市で漆掻きの伝統技術を観光に結び付ける動きも出ている。
- 地元小学生などが伝統文化として学ぶことにより地元の誇りとしての理解が深まっている。
- 漆に関わる若い人材が移り住むことにより、地域の担い手にもなっている。

後継者が漆掻きの技術を守ることにより、地域自体を守る事にも繋がる。